

浄土

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回）
 昭和二十四年四月二十八日運輸省特別扱承認雑誌第三五二号
 昭和三十三年三月二十五日印刷 昭和三十三年四月一日発行

第二十四卷 第四号



四月号

丁丑



浄土寺院必読の書 増版

仏教大学教授坪井俊映著

浄土三部経概説 全

A5上質紙・特製本
三段組・六三五頁
定価一、二〇〇円

初版たちまち売切れ！

仏書のベストセラーはこれだ！

浄土三部経を最も判り易く解説

した本書を ぜひ

毎日新聞評 この経典は浄土門の拠所となるもの。浄土宗義を明らかにする目的で綿密に注訳、解説が行われている。

常盤大定 監修

仏典説話全集 全十二巻 特価

B6各四三〇頁余 総ルビ
各巻 四〇〇円
三、六〇〇円
(送料共)

御希望に依り第三巻及第七巻増刷して全十二巻を揃えましたからお申込下さい。なお分冊売りはしません。

高橋良和著

影絵物語 法然さま

価九〇円
一六円

法然上人の御一代記を美しい影絵によって物語る二色刷の影絵絵本

話 童 児 幼

日本図書館協会選定図書
高橋良和・小関尚之・
山田巖雄他著

星の花

価一八〇円
二四円
すぐその儘お話に使えるお話の台本

発行所 隆文館

浄土 四月号 目次

表紙・扉絵……………結城天童

降誕……………(2)

お念仏をどう生かすか……………佐藤賢順…(7)

釈尊と将棋……………佐々木孝丸…(4)

石楠花は咲けど……………吉田夏子…(14)

松籟とともに……………石上善応…(18)

童話迷子の小羊……………渋川敬子…(22)

良寛さん……………(26)

犬と人間の間柄……………(32)

感心したこと……………(28)

信仰相談……………佐藤賢順…(30)

歌壇……………岩野喜久代…(21)

法然上人の言葉……………増谷文雄…(34)

扉の御法話……………しんれ者の姿…(28)

新刊紹介……………友を得るには…(32)

会員だより……………(40)

会員紹介……………(25)

浄土

四月号

名号をきくといふとも信ぜずば、きかざるがごとし。たとひ信ずといふとも唱へずば、信ぜざるがごとし。ただ常に念仏すべきなり。
法然上人御法語



降誕

かように、わたくしはい聞いた。

あるとき、大妃マヤ夫人、静かな眠りにつかれたとき、夢中に六牙の白象のすがたが現れた。その頭はあざやかな朱色にして、金色さんぜんたる牙をもち、澄みわたりたる空より紫雲に乗じて下りきたり、夫人の右脇より胎内に入るをみる。夫人、夢みおわりて、この不可思議なことを大王にかたられた。

ときに大王、占夢波羅門をまねきて夢占いをこう。かれ占いおわりてかように答う。

「大王よ、夢みるところの瑞相を、いまつぶさにお説きしよう。われいま説きのべようとするところは、その昔、神仙諸天が經書典籍に明かすところである。

もし母人右脇に、日天の入る夢をみれば、かの母の生むところの子は、かならず転輪王となろう。

もし母人右脇に、月天の入る夢をみれば、かの母の生むところの子は、諸王の中の最勝のものとなろう。

もし母人右脇に、白象の入る夢をみれば、かの母の生むところの子は、三界にきわみなく尊く、よく諸々の衆生を利益し、怨みも憎しみもなく、すべて生きと生けるものみな平等に、深い煩惱の海より度脱するであろう。

大王よ、夫人のみられたは、甚だ善きものである。大王よ、いまだちに、夫人の懐胎を慶び、幸いをいのることである。かならず聖子が生まれるであろう。かれ、のちにおいて必ず仏道を成じて、名聞遠くおよびて、救いの

み法を説くであらう。」

ときに、大王、心大いに歓喜し、かぎりなき踊躍を覚えた。

大妃マヤ夫人、託胎ののち、母身安穩にして、もろもろの悩み患いなく、知恵はますますみがる。さらに、五戒をまもりて、身も心も清浄にして、信仰の念篤く、博愛のこころを人々に及ぼし、悪しきをするて、善におもむき、安案にして何ごとも畏れるものがなかつた。

大妃マヤ夫人、ある一日、ルンビニー園に出遊された。ときに、あたかも無憂樹の花々爛熳と咲き匂い、馥郁たるよき香り放ち、園いちめん諸宝がかがやきわたる。

余りもの美しさにみとれて、大妃マヤ夫人、樹枝の一枝を手折ろうとなされた。ときに、枝が自然に曲り、柔輭にして低くたれ下る。夫人、地に立ちて樹枝に手をかけられたとき、地大いに震動し、光明あまねく照りわたる。四天子は手に香水をささげて、大妃母前において告げた。

「聖母、いま聖子を生む、憂いを懷くな。」

大妃マヤ夫人の胎をいでた菩薩の身は、清浄であつてけがれなく、あたかも淨明の珠のごとくであつた。

右脇よりいでて地に立ちて、人の扶持することなく、四方に七歩づつ歩をすすめ、み手をあげて、声高らかに宣言された。

「天上天下唯我のみ尊しと為す。要は衆生の生老病死を度するにあり」

ときに、一は温、一は冷の二泉湧きいで、微妙の風香しうして、天地ことごとく光明に満ち、万物みな歓びて、聖なる人の降誕をことほぎ称えた。

釈尊と將棋

佐々木孝丸

一年中仕事に追われ通しで、つい仏様に御無沙汰申し上げている私も、四月の花まつり前後になると、やはり御釈迦様のことを思い浮べるようになる。思い浮べるといつたところで、生ま身の御釈迦様にお目にかかったことがあるわけもなく、写真や自画像を見たわけでもないの、ただ、各種の仏伝や仏画の伝えるところによつて、こうもあつたろうかと、深い慈悲をたたえたお顔を想像してみるにすぎないこと勿論だ。

生れ落ちたとたんに、例の、「天上天下唯我独尊」をのたまわつたという伝説中の釈尊しか知らなかつた頃の私には、御釈迦様は、われわれ人間どもとはあまりにもかけ離れた、超越的な不可思議な存在で、ただただ目を見張るしかなかった。が、実在の釈尊は、人間以上のものでも、人間以外のものでもなく、人間として最高度に完成された人格に外ならなかつたのだ、ということを知るに及んで、釈尊は私にとつて、きわ

めて身近かな、どんな相談をもちかけても、「そうかそうか」と、いつもにこやかに頷きながらこちらの話をきいてくれる「おじさん」みたいなものになつたのである——ということは、釈尊に対する敬慕の念が薄らいで来たということの意味ではなく、反対に、益々尊敬の念が濃くなつてきたことを意味するのだが……そこで凡下の私は、私なりの低俗きわまる想像図の中へお釈迦様の御登場を願つて、私の想像通りにふるまつていただく……そうした空想の裡で過すひとときは、私にとつてこの上なく愉しいのである。

……どういふものか、寺の坊主、ことに、禪寺の和尚などには碁を打つものが多い。

「碁は勝と見たる和尚の高笑い」などという川柳もあるほどで、囲碁と寺の和尚に関する小咄・漫文・漫画の類は数えきれないほどある。寺の坊主は何故碁を



打つか？ などという命題は姑くおあづけとして……
囲碁が支那から伝わったものであるのは誰でも知つて
いるし、その盤面の目盛りは三百六十一で、支那流の
宇宙乾艮をかたどつたものといわれている。

囲碁の発祥地が支那だつたとすると、御釈迦様は碁
を打たれたことはなかつただろう、などと、とつぴよ
うしもないことを、私は想像したりするのだが、そこ
からさらに私は飛躍的な空想をする。

一体私は、碁よりも将棋の方が好きで、ときどき柄
にもなく、将棋の「原理」みたいなものについて、あ
れこれ勝手な空想をほしひままにして、独りで楽しん
でいることがある。

将棋はいうまでもなく、盤面八十一の区劃の中で、
四十箇の駒が動き廻るにすぎない。それでいて、棋史
初まつて以来今日まで、似た形の棋譜はあつても、全
く同じ棋譜というものは一つも残つていない。それほ
ど将棋には無数の変化がある。

それでいつか、「八十一の区劃の中で、四十箇の駒
が動くということでは、明らかに有限の世界であり、
しかもその組み合わせが数えきれない天文学的数字にな
る」という点では無限大であるといつてもいい。つまり、

有限にして無限、無限にして有限——将棋の原理には、
東洋哲学、就中、仏教哲学に通ずるものがありはしな
いか」などという駄文を、臆面もなく将棋の専門雑誌
に寄せたことがある。

ところで、将棋の発祥地は印度だといわれている。
それで私の空想は、忽ち古代の印度へと飛び、祇園精
舎の花咲きみだれたうらかな春景色の中で、のんび
りと盤をはさんで対座している阿難と舍利弗の姿を目
に浮べるのである。

二人とも仲々強い。局面は今や中盤の難所、一手し
くじれば、忽ち形勢はガタガタに崩れてしまうという
ところ……したがつて、兩人とも慎重に構え容易に手
を下さない。

博聞強記をほこる口達者な阿難は、

「どうだ舍利君、この手は先々代の名人が挑戦者の
バラモン棋士を退けて、名人位を確保したときの古今
の名手だ。この手は知らなかつたろう……先づこの辺
が投げどきかな」などと、口三味線で相手を負かしに
かかろうとする。

が、知慧第一、神通第一の舍利弗は、そんな三味線
に乗せられるほどあまくはない。黙つたままニヤリと

して次ぎの一手を指す。

「ほほう、おいでなすつたね、王の早逃げ三手の得、とこう上つておけば手が出まい」

多弁な阿難はちよつとの間も黙つていない。が、舍利弗が、パチンと駒音高く次ぎの一手を指したとき、阿難のおしやべりはハタとやみ、

「アリヤアリヤ！」と奇声を発し、ついで、「ウン」と唸つてしまつた。まともに「王手飛車」をくらつたのである。

「阿難よ、何を唸つておる？」

不意に声をかけられたので振り向いてみると、苑内を逍遙しておられた世尊が、後ろからひよいと覗きこんでおられたのだ。

「どうもえらい目に会いました。ウーン」

阿難はまだ唸つている。

「なるほど王手飛車か……これはひどい。舍利弗よ、その手は少し残酷すぎはしないか、一手待つて慈悲をたれてやりなさい」

「ですけれども世尊、この手を待てば、私の方の王が頓死いたします」

舍利弗はおだやかに言葉を返す。

「なるほどそうか。……では二人とも、王将無しでやりなさい。そうすれば王手飛車を喰う氣遣いはない」
王将無しの将棋……

呆ツ氣にとられて二人をそこへ残して、世尊は、相変らずにこにこと微笑をたたえながら、悠々寛々と散策をつづけられる……

と、こんなバカ氣たことを空想して、私は独りでにたにたと悦に入っているのである。

釈尊やその弟子たちが、ホントに将棋を指したかどうかが、そんな「事実」のセンサクはどうでもよいので、私はただ、この人生の比類なき偉大な師を、みんなが、もつともつと身近かに感じ、親しみを以て接するようになれば——いや、仏教家たちがそうさせるように努力を傾けて行くことによつて、仏教のあり方なども、ずつと変つてくるのではないか、とそう思うのである。
花祭りの行事なども、そんな点から、も一度、根本的に考えなおされてよいのではないか。



お念佛をどう生かすか

佐 藤 賢 順

念仏といいますが大変に古臭いまじない事のように思えて、これが現代の生活とは何の結びつきもないことのように考えている人も少なくないことでありましょうが、これをどう理解したらよろしいか、現代の生活に念仏はどういう意義を持つているか、今朝はこの話題についてお話いたします。

今日では念仏といえば口に南無阿弥陀仏を唱えることであるということは、常識になつていて誰れも不思議と思いませんが、もともとは字の通り、仏を念ずること、心に仏の姿を思い浮べることでありました。これを観念とか観仏とかいいます。そして仏といいますが、諸法の実相そのままであり、宇宙の姿そのままであるのですから、それを中心の中に観察する、これが念仏であつたのです。しかしこういう修行は大変に難しいことで、なかなか誰れでもできるといふわけにはいきません。念仏はそんな難しい修行で

はなくて、口に仏の名を称えることである。ナムアミダ仏を称えることである、それならば誰にでもできる、従つて誰れでも救われる、ということに気づいて、これこそ仏陀の教えの中心であり真実であることを明らかにしたのが、日本浄土教であります、法然や親鸞の教えであります。

なぜそうなつてきたか、それを知るためには一まず、仏陀釈尊の教えに遡上つてみなければなりません。釈尊の教えはいろいろに説かれていて、また大変に深いものでありますけれども、結局のところつづめていけば、智慧と慈悲ということになります。智慧すなわち人生や世界の真実の姿を知るといふ宗教的な叡智と、慈悲すなわち真実の姿を知るが故にこそほんとうに他人を慈しみ救うことができるという実践的な愛、この二つが仏陀の教えの中心でありました。仏陀釈尊は、この智慧を体得した人でありました。智慧と慈悲とは二つのことではなく、智慧を得るからこそ慈悲を行ふことができるのであります。

ところでこの智慧と慈悲と一体であるという教えを、特に智慧の方面から眺めますと、自分もまた釈尊のように智慧を磨いて悟りを開こうという自力の立場となりますし、そういう望みを抑えて、特に慈悲という方面から眺めますと、仏陀の慈悲、救済の力にすべてを任せて、救いを受けようという他力の立場となります。釈尊はただ歴史的にこの世に存在しただけの人格ではなくて、永遠の仏陀が仮りに現実の仏としてこの世に現れたのであるから、仏というものは常住である、いつも実在する、と信ずるのであります。念仏の教えはこういう系統から生れてきたのであります。

日本仏教は、印度仏教のそのままの輸入でもなく、中国仏教のそのままの移植でもありません。日本の民族性と風土との上に咲いた独特の文化であります。わが国には古くから念仏の教えが中国から伝えられていて、比叡山の慧心僧都などにおいて、念仏信仰は次第に盛になりました。それは時代精神といえますか時代の気運といえますか、一人や二人の力ではなく、少数の人の声として高まってきたのではなく、多数の人の声として高まってきたのでした。しかし慧心僧都にしても、まだ口にナムアマミダ仏を称える念仏でなければならぬという所まで、踏み切ったわけでは

なく、心に諸法の実物を観ずる觀念の念仏が一番勝れているのだけれども、それができなければ、口に称える念仏でもよい、というように、自力と他力との間を、さまよっていたとでもいいでしょうか。法然上人はこの時代の意識に最も敏感で、十分にその感覚を身につけていましたが、慧心僧都の口に称える念仏でもいい、という考え方には、不満でおりました。たまたま中国の唐の善導大師——といいますが法然の頃から五百年も前の人ですが——の教えに接する機会が恵まれて、善導大師の本によつて、念仏とは口にナムアマミダ仏を称えることであると教えられて、浄土教へと踏み切ったのであります。

二

法然の浄土教の根底となつてゐるものは、時代の感じ方、受け取り方です。歴史の見方であります。末法の意識、世の中がだんだん悪くなると見る見方です。もちろんこれも遠く中国の隋の末頃から次第に濃厚になつてきたのであります。法然の頃には、わが国でもそういう時代意識がひしひしと身に迫つてきたのであります。末法の意識というのは、宗教に特有の歴史の見方で、世の中は教祖、例えば釈尊を離れば離れるほど墮落していく、罪惡に満ちていく、と見るのであります。これは近頃の歴史の見方のよう

に、世の中は段々、開けていく、便利になつていく、良くなつていく、という見方とは反対の見方です。なぜそうなるかといいますと、世の中が悪くなる、というのは、人間の心も、自分の心を反省することを中心にして歴史を眺めるのでありますが、世の中は次第に進歩している、よくなつていく、と見るのは、人間の心を反省するのではなく、生活の地盤、物質とか経済とかを中心眺めているからです。現在、自然科学、原子物理学は月に日に進んでおりますが、しかし決してそれで世の中がよくなつていくといえないであります。物質生活、経済生活は昔に比べて勿論よくなつていくけれども、人類皆殺しの武器ばかり發明されて、ほんとうの平和が確立されて安心して生活していくことはできません。それは余談に亘りましたが、宗教的な歴史観というものは、心を中心にした歴史の見方で、法然上人の頃には、饑饉、戦争、地震、大火等の災害が続いたということも手伝つて、いよいよ末法であるという時代意識が強まつたのであります。「智慧の眼、まなこ盲い、行法の足、なえたるこの頃のわれら」と感じたのです。「この頃のわれら」これが法然上人が受けとつた時代意識です。

上人はこうして「今のこの私」というものをありのままに把えました。法然の独特の人間観、罪惡観が生れてきま

した。これが、他力信仰の根底になります。

法然上人は美作国久米の南条の人ですが、九歳のとき、父の漆時国が恨を受けて、夜討ちに会い、重傷を負いました。そして呼吸を引き取るとき、遺言して、「仇をうらむこと勿れ、もし恨みもつて仇を打てば、また仇は仕返しをするのであらう。そして、またこちらがそれに報いるというように、恨は世々に尽きることがないであらう。はやく出家をして、わが菩提を弔つてくれ」と訓したのが動機で、出家をしたと伝えております。十五歳で比叡山に登つて、きびしい研学と修道が始まつたのでした。ここで十五歳から二十四歳まで勉強して、その後は京都、奈良などの碩学を尋ねて、教えを求めて歩きました。

大藏經を通読すること五遍にも及んだといひます。伝記によりますと、「智慧第一の誉、ちまたに満ち、多聞広学のきこえ世にあまねし。おおよそわが願にわたれる聖教伝記、まなこ眼にあてずということなし」とありますが、これは少し大袈裟だとしても、非常な勉強家であつたことがわかります。その人が人間の知性の力のはかなさに気付き、知識に限りあることをなげいて、

我はこれ烏帽子も着ざる男なり。十惡の法然房、愚痴の法然房が、念仏して往生せんというなり。

とか、

一文不知の愚鈍の身になして、あま入道の無知のともがらに同じうして、智者のふるまいをせずして、ただ一向に念仏すべし。

とか、述懐しています。

法然房の人間探求は、あるべき理想の姿としての人間を空想して、一種の偶像を描いて、これを高く評価しているのではありません。あるがままの現実の人間を、少しも買いかぶらずに把えて、その力を見極めていっているのです。その結果が、「今この私」を、「愚痴の法然房、五逆十悪の法然房」と反省したのです。愚かで罪深い者と見極めたのであります。

五逆十悪というのはあらゆる重い罪のすべてをいうのでありますが、自分を五逆十悪の法然房と反省するのは、実際に法然上人が、そんな重い罪の数々を犯したということなのでしょうか。上人の生涯は持戒堅固で清潔そのものでした。他の高僧知識の中には、破乱を極めた生涯を送った人達も少くありませんが、上人の一生は破乱がなさすぎるといつてもよいほどです。ですから小説や戯曲にはどうしてもならないのです。亡くなった中里介山氏——この人は「法然」という伝記小説や「黒谷夜話」という法然の弟子

や信者たちを書いたものがありますが——から法然の生涯は大きすぎてどうしても小説にならない。小説になるのはまず文覚あたりまでだ、もし法然を書くならば、弟子や信者を描いて、間接的に法然の大きさを髣髴させるより外はない、という話をきいたことがあります。その間接的に描くという試みが、『黒谷夜話』です。また一昨年亡くなった吉田絃二郎氏に、小説か戯曲かで法然を書いてくれるようお願いしたのですが、そしてそれは二十数年も前からでしたが、ついに出来上らなかつたわけです。絃二郎氏も介山氏と同じように法然を描くことの難しさを訴えていました。これは上人の生涯が純潔で厳格で、破乱がなかつたからでありましょう。それなのに、法然自らの反省としては、愚か者であらゆる罪の数々を犯したとは、いかなることでしょう。それは人間のはかなさ、頼りなさについての反省で、いつどこでいかなる罪をしでかさないともわからないという不安であります。

三

しかしその人間にも静かに顧みると、宗教心というものはあるのです。法然上人はこういつています。

たとえば葦のしげき池に、十五夜の月の宿りたるは、よそにては月宿りたりとも見えねども、よくよく立寄り

て見れば、葦間をわけて宿るなり。妄念の葦はしげけれども、三心の月は宿るなり。

これは夏などによく見かける景色で、一面に葦の茂っている池に月影が映っているのは、通りすがりにちよつと見ただけでは、気がつかないけれども、よく見ると、葦間の僅かな水面に、月の光がチラチラとのぞかれる。人間の宗教心というものもその通りで、雑念、妄念のわき起るその奥底に、時々良い心がひらめいて表われるというのです。三心とは(一)まごころ、(二)深く信ずる心、(三)助け合う心の三つであります。この三つの心は結局一つことをいうので、今の言葉でいえば、宗教心であります。このうちでは、深く信ずる心が一番深い意味を持っています。

深く信ずるといふのは何を信ずるのかといいますが、仏の救いを深く信ずるのです。初めにも申しましたように、仏とは智慧と慈悲とが一体となつて、働きかけてくる救済の力であります。歴史上では釈尊において、仏陀として現われましたが、それは永遠にして常住の仏陀である、今も現にここで働きかけている生きた仏陀であります。それが阿弥陀仏であります。

阿弥陀仏という言葉は、限らない命と光という意味です。阿弥陀仏について一番大切なことは、本願が成就した仏で

あるということです。ここで本願ということがでてきました。これは念仏信仰で中心となることで、これについては、(本願の仏は報身であるとか、酬因身であるとか)いろいろと難しい哲学的な釈解がありますが、そんなことを述べるといよいよわからなくなります。そうかといつて無量寿経に書いてあるような本願の物語を——阿弥陀仏の本願を最も委しく説いたのは、無量寿経ですが——、その物語をそのままお話しても、現代の若い人達には、神話でも読んでいるような気がして却つて解らなくなるでしょう。試みにお経に説いてあるまますを、かいつまんでお話してみましようか。

昔、昔、ある国王があつた、その時、世に出た仏、世自在王仏の説法を聞いて、発心し、自分も無上道を悟ろうとし意を決して、国を棄て王の位を捨て捨門となつて、法蔵と名乗つた。或る時、世自在王仏のもとに至つて、「私はこれからいかなる厳しい修行であろうとも、必ずなしとげて、悟りを得て、仏の国土を作り上げて、苦しみ悩むすべての衆生を救い取つてやろうと決心しました」といつて、その仏国土を作り上げるために四十八カ条の誓いを立てたのであります。これが法蔵比丘の四十八の本願であります。そして法蔵は、人間の計算では計りきれないほどの長い間

の修行をして、立派な仏国土を作り上げ、四十八カ条の約束を果して、今、現に仏となつてゐる、これが阿弥陀仏であるといひであります。そして四十八の本願の中では第十八番の本願が最も大切な本願で、それはこういう約束であります。

もし人々が、心から私の国に生れたいと思つて、私の名を十度称えるならば、必ず生れさせてやろう。

であるから、その仏の名を称える者、ナムアミダ仏を称える者は、本願の力に導かれて、必ず仏国土に生れることができる、というのであります。法然上人はこれを法蔵比丘が撰択した本願の念仏と呼んでゐます。

しかしこのような物語をそのまま語られても、今の人達には却つて信じられないのではないでしょうか。ここで大切なことは、ここで語られてゐる物語の比喩的な意味を読みとることです。本願とは人間を超えた大きな生命力が、人間を包み護り育てようとして、今、ここで私に働きかけてゐる——この物語りの卒直な意味はこういうことです。こう素直に受けとれば、本願を信ずることは難しいことではありませんまい。

四

さてところで、ナムアミダ仏とはどういうことでしょう

か。或る女子高校の国語の試験にこういう問題を出しました。答案には二三珍答案、迷答案がありました。「ナムはアミダ仏の枕言葉です。」それからまたこういうのもありました。「南無は南に無いと書きますが、これは阿弥陀仏は西方極楽にいらつしやるから、南にはいないということですから……」。これは西方極楽を知つてゐるだけでもまずまず点数をつけてよいでしょう。ナムというのは、小供がお母さんを呼ぶときに思わず出る、おおとか、ねえ、とかうい感歎詞と同じで、心からの呼びかけです。「おお、限りない生命の仏に」というのがナムアミダ仏です。いま西方極楽とということが出ましたが、それでは、念仏を称えて西方極楽に往生するとはどういうことでしょうか。

法然上人にはいろいろの弟子がいました。弁阿や証空や親鸞のような出家の弟子も、関白藤原の兼実や平重衡のような貴族も、熊谷次郎真実や宇都宮頼綱のような御家人も、強盗殺人の前科を重ねた天野の四郎のような凶悪犯人も、室津の遊女——舟乗り相手の売笑婦——もいました。身分を問はず、階級を問はず、善人と悪人とを分たず、教養のあるとなしを選ばず、みな同じように念仏の教えに救われて一味の法悦の世界に住むことができました。どんな世界だつたでしょうか。上人はこういう弟子、信者たちにいつ

も懇切な手紙をやっております。大胡の大郎という弟子に与えた手紙の一節でこういっております。

衆生の生死を離るる道、仏の教えさまざまに多く候えども、この頃の人の三界を出でて生死を離るる道は、ただ極樂へ往生し候ばかりなり。

この言葉によつてもわかりますように、極樂に生れるということは三界を超え出でる事であります。浄土の教えの伝統は、遠く印度の竜樹菩薩から中国の祖師たちを経て、法然、親鸞へと流れているのでありますが、これらの祖師たちを通じて共通の精神は、極樂浄土が三界を超え出でた事であるということであります。では三界とはどういう所かといひますと一口にいって、空間と時間の制限を受けているこの現実の世界ということですから、三界を超えるとは、空間的にも時間的にも制限されたこの現実の世界を超えて、永遠にして常住の世界に生きるということであります。ですから極樂が西方にあるというのは或る一つの表わし方で、実はそういう空間的、地理的制限を受けていないのが極樂であります。また来世だ、未来の国だというのも或る一つ言い方で、極樂は過去から、現在へ、現在から未来へとというような、変化して極りない流転の世界ではありません。永遠の今である生きた国であります。死んでから行く未来

の国というのは或る一つの言い表わし方ではありますが、上人は、

往生の業、成就は臨終、平生にわたるべし。

といつています。極樂往生が成しとげられるのは臨終、平生を問わない、という意味であります。

さきほど仏の本願ということを申しました。本願は仏の大慈悲心が衆生を救済しようとして働きかけてくる約束であるとして申しました。ですから極樂という常住の世界を作り上げていくのは、願心、慈悲心であります。今の言葉でいいますと、私心を全く離れた純粹の愛であります。こういう世界こそ実眞の世界でありますから、極樂は眞実と愛の世界である、ということができます。ナミアマミダ仏はすべての私の計らいを捨てて、永遠の仏陀の導きに任せて、この世界に生きることでもあります。

極樂に生れるということは、この世で満されない欲望をそこで満たして快樂の限りを尽そうというのではありません。それどころではない。きびしい実践によつて、私中心の欲望を離れて、眞実と絶対愛の世界を築き上げていくことであります。それが念仏生活の目的であります。

石楠花は咲けど



——思い出すこども——

吉田 夏子

私は戦前戦後、七年程続けて軽井沢へ、旦那様のお供をしてまいりました。

軽井沢での旦那様の御生活は、誰も起きないうちに、朝早く星野温泉の共同風呂へ行かれることで、一日が初まるのでした。

散歩も毎日かかさずなさっておられました。が、時には草軽電鉄の鶴溜つるだまの駅まで、山を越えて足を伸ばしました。そして山麓をこことと走るマツチ箱のような電車を御覧になるのを楽しみにおいででした。

「電車はまだ来ませんか」

「上のぼりですか、下くだりですか」

「どっちでもいい、んですよ」

駅長さんは笑いながらすすけた駅の時計を見ては教えてくれるのでした。駅といっても名ばかりの、そこには駅長さん夫婦が住んでいて、駅長さんの丹精になるらしい野菜などが、狭いホームに沿って青々としておりました。辺りには一面に松虫草や撫子が咲いていて、まことに静かな風景でございました。

旦那様は、まだ一時間も一時間半もたたないと来ない電車を、まるで子供のようなお気持で待っておられるのでした。

夜は星があまりにも美しいので、気味が悪いとおっしゃってられました。お客様でもおいでになれば、星野温泉まで山を下ってお送りするのですが、さもなくば夜はほとんど外出なさいませんでした。

或る夜、私がふと眼を覚ますと、枕許に旦那様が立っておられました。

故郷を立つ日、大きな杏あんずの木の下に佇たたずって私を見送ってくれた母が、

「夏子や、御主人様おひとりのお家には、御奉公しちゃいけませんよ」といった言葉が、咄嗟に私の脳裡に閃めきました。私が思わず、起き上ろうといたしますと、旦那様は、

「お夏さん、起きなくってもいいんだよ。風邪をひくといけないから、これを掛けてあげよう」といって、使わずに押入にしまつてあった蚊帳を出して、私の掻卷の上に、そっと掛けてくださいました。そして、裾の方を軽く叩いてまた御自分のお部屋に戻って行かれました。

私は薄暗い電燈の光に、影絵のように立っておられる旦那様の後姿をうち仰ぐと、ぐつと眼頭が熱くなって、思わず搔卷の襟に顔を埋めてしまいました。

お邸には、ジャック、ジョナア、メリーの三匹の犬がおりました。奥様が亡くなってからの旦那様をお慰めしたのは、この三匹の犬たちでございました。

雨の日も風の日も、毎日犬を連れて散歩にお出掛けになりました。旦那様が二匹を連れて先きに行かれますと、私がメリーに引かれながら後からお供をするのでした。

旦那様は奥様が亡くなってから三周忌まで、一切肉食をさけて精進料理を召し上っておられました。ですから、お客様に、

「家では犬が一番御馳走を食べています」とよくお話になって、苦笑しておられました。

しかし、戦争が次第に烈しくなって、犬を連れて歩くことすら気がひけるようになり、食糧事情の悪化にともない、犬を飼うことが大変困難になってまいりました。

「犬に泣く詩人」などという見出しの新聞記事が出たりして、華族様の奥様から牛肉が届けられたり、料理屋さんから残飯を取りに来るようにと御親切にいつてくださいました。そうしたことも長くは続きませんでした。

次第に痩せ細って行く犬を見ては、寂しそうにしておられる旦那様のお姿に、私はいてもたつてもおられませんでした。私はリュックを背負い、風呂敷包を提げては出掛けま

した。小岩にいる姉を頼って行き、大豆粕の入ったお米を買って帰る途中、駅でリュックの紐が切れて困ったこともございました。

配給物など焼石に水で、私が買い出しに行こうとすると、「あなたはよ、その娘だから、もしものことがあったら親御さ

んに対して申訳けがない」といって、なかなかお許るしくださいませんでした。そういう旦那様も私もお米の御飯などほとんどいただきますませんでした。ただ三匹の犬さえ食べさせることができれば、自分たちはどうでもよかったのでした。犬は正直で、芋の蔓のゆでたものなど見向きもしませんので、その食物には大変な苦勞をいたしました。



(ありし日の絃二郎先生)

扉の御法語

このご法語は「ただ常に念仏すべきなり」の一句につきるもので、議論の余地のない強いものを感じます。またこれは勅修御伝第二十一巻にでているもので、がんらいこの第二十一巻は「上人のつねに仰られける御詞」を集めたものです。従ってこの巻には、普段われわれが聞きなれた有名な句ばかりから成っています。これからもこの巻から沢山のご法語を紹介することになるでしょう。

第二十一巻を拝見してゆくと、どれもこれも寸鉄といったもので、宗祖上人の意気天をぬくの感が身にせまってきます。しかし中に仲々お人の悪い句もあって微笑させられるものもあります。たとえば

「魚を食うような奴に往生できるものか。往生をねがう人なら、魚も食わず精進に生活してゆくのが当り前だ。だから魚を食わぬ者こそ往生するのだ」

すると他の一人が反対しました。

旦那様は何かの会合がありますと、御自分では気が進まない会でありましよう、一片のパン、一塊の肉切れを犬にやりたいために、遠くまでお出掛けになられました。

その犬たちも、終戦の頃に相次いで、栄養失調が原因で死んでしまいました。

旦那様の御悲歎はまことに筆舌に尽せぬものがございました。

昼間はお客様が多いので、お仕事はたいいてい夜にかぎられ、遅くまでなさっておられました。

「お夏さん、もう少しお炭を出しておいてくださいよ」といわれ、お仕事場にしておられたお座敷へ入られるのでございました。ですから、御用でもないかぎり、誰もめったにお座敷へは入りませんでした。

或る晩、御用があつておしずさんと私が、お座敷へ入ってゆきますと、

「お夏さん、おしずさんの真似をして、あなたもそこから入って来ましたね。だから年上の人はよく気をつけなくてはいけませんねと

いわれ、お座敷への入口を教えられ、私たちをお諭しになりました。

御丈夫であつた頃は、夜などもお洋服を着ておられるうちに、私たちに御用をお言い付けになられ、御寝間着姿などお見せになったことは、かつてございませんでした。

お座敷の隅に、ズボンが脱ぎ捨ててあつたのを見て、お畳みしておこうと思いながら、手も触れずにお部屋を出て来たことも、たびたびございました。

身体さえ御不自由にならなければ、決して人手などお借りになることなどないお方でございました。

雑誌社や出版社のお客様が多い中に、とりわけ増上寺の御前様（大島徹水老師）や、奥様の御命日に毎月かかさず御回向に見えられる講安寺の池田立基先生など、仏様の御関係のお客様がいらつしやるのを何よりも心待ちにしておいでになりました。

御前様はおいでになられるたびに、お離れのお座敷がお気に入り、

「何をいうか、魚を食わぬ等と聖人ぶった奴こそ往生ができないのだ。美味しい魚はどしどし食うべし。食いたい魚を我まん等せずに食うものは食い、栄養をつけて元氣よくお念仏する者こそ往生できるのだ」

この二人は自分の主張を曲げないで、さかんに議論していました。するとこの話を上人がおききになって、こう教えられました。

「魚くふもの往生を往生をせんには、鵜ぞせんずる。魚くはぬものせんには、猿ぞせんずる。くふにもよらず、くはぬにもよらず。ただ念仏申もの往生はするとぞ、源空はしりたり」

まさに鵜や猿の方がお前たちの先輩だとばかり申されたのには、さすがの弟子も恐れ入ったことでしよう。われわれ如きが皮肉ったなら、呵々大笑するか、微笑一つで終るわけですが、何せ一代の碩学の上人から申されては、全く返す言葉もありません。

「ここにいとまろで京都に來たようだ」といつて大變お喜びになられました。

お食事の後に、かならず入歯をお洗ひになるお水を、コップに入れて差上げるのが私のお役目でした。

その御前様が、初めてお見えになられましたときのことでございました。私が、

「旦那様、あのお方は達磨様みたいなお方ですな」と申しますと、

「ああ、達磨様のように偉いお坊様だよ」と声をたててお笑いになりました。

また、池田先生からは、お芝居のお話や世

間話などを伺うことが、身体が御不自由になつて世の中のことに疎い旦那様の唯一の慰めとなつておりました。

亡くなつた年に、何年にも花を持たなかつたお庭の石楠花いかりなが、珍しく咲きました。

お葬式の朝、私はその一枝を手折つて御棺の前に供えました。そして御遺骸にこの世のお訣れをするとき、私はその花を千切つて、善財童子の像のようにやや右にお首を傾けて合掌されている御顔の近くに、そつとお入れいたしました。(昭和三三、二、一五)

生きた伝導に浄土トラクトを

大正大学教授 佐藤賢順著

○信仰へのみちびき

- 目次 1. 大慈悲の仏教
2. 知性を超えて
3. 美的情感を超えて
4. 本願の不思議にて
5. すべてを包む愛
6. 人生は信ずる心から
7. お導びきままに

B 5 版16頁 定価15円 送料8円

大正大学教授 竹中信常著

○ 仏 教 入 門

- 目次 1. 馬に水を飲ませるもの
2. 流れゆくもの
3. なやみとまよいのもと
4. すでに救われている
5. 信ずるころ
6. 仏を思う
7. 新しい生活
8. 美わしき世界の建設

B 5 版31頁 定価20円 送料8円

松籟しょうらいとともに

— 芦名の浄楽寺 —

石 上 善 応



(鏡 面 仏)

鎌倉一帯の梅が散り初めるといふ声を聞いて、あわてて芦名の常楽寺詣での日程を決めた。二月十日前後で、もう梅が散り出すもの

なのだろうか、さして鎌倉・東京間のへだたりがあるとは思っていなかった私は、三浦半島一帯の暖かさを、新ためて考え直してみた。

その日はS君同道で、逗子の駅に降り立ったのは、午前十一時にまだ余裕があった。長

井行のバスに乗って。葉山の御用邸付近にさしかかる。言わずもがなではあるが、景色は快いほど開けてくる。海岸の松の風情はいつ眺めてもよいものだ。淡い水平線に緑がくつきり浮んでいる。S君が指さす方向には富士が大きく見えてもいた。久しぶりの清々しい風光も観る者の気持を確かに変えてくれる。ただ、道路改修中のために、バスが上下左右に揺り動かされるのには閉口はしたけれども。

しかし、弥次喜多同様の二人ではこの感想もお話にはならない。その二人がともかく神妙な顔つきで、常楽寺の内陣にかしこまったのは全く珍妙そのものであったろう。芦名で降りて常楽寺を尋ねると、一つ手前の停留所のまん前であった。それほど奥深くない並木

の彼方に本堂が見える。御本尊を拝観する前に気持を整える必要もあらうと、まず境内を歩き廻る。本堂の裏手には若々しい竹藪を背景に梅の若木が満開を過ぎた花を飾っていた。この辺一帯の松と並べれば、松竹梅が見事にでき上る。その上、椿の花まで今を盛りと咲いているのには、この付近の氣候を知らない私を驚かせるのに充分であった。歴代上人を中心にお墓や像などが安置されてある。S君は持前の史学者らしくお墓の裏を覗き廻っている。

案内を請うと御住職は親切に内陣に二人を通し、丁寧に説明をしてくれた。それによれば、鎌倉光明寺の末寺になり、白旗寂恵上人を中興開山にする由。寺伝では源頼朝が、父義朝の菩提を祈願するため、七堂伽藍を創建

したことから始まる。元来、鎌倉大御堂谷にあり、南の御堂勝長寿院と号し、後にこの地へ遷されたものだそうである。吾妻鏡の元暦二年四月十二日の条には「南御堂の柱立つなり。……立て柱、棟上げなどの事終る」と記されている。吾妻鏡には頻りに南御堂、勝長寿院の名がでてくるところから、当時は普通にこう呼ばれていたものであろう。

阿弥陀三尊から押し出されてくる威圧感はずばらしいものがある。内陣はこの威圧感にみちみちている。奈良の仏師、成朝の作と伝えられているこの仏像は、一般の阿弥陀像と少し異った印象を与えてくれた。三尊が三尊とも全身に塗金が施されている。なにか補修することでもあったのか、明らかに後世の塗金のため、仏像の線が少しくずれて見えるように受けとれる。伝成朝作といわれるだけに目と口許は特にすばらしい。本尊阿弥陀如来は上品下生の印を結ばれ、特に右の挙げられているみ手の縷網相（俗にいう指の間の水掻き）は世の中の人々が全て、極楽に往生しないうちは決して成覚しないと云われた、あの弥阿の誓願を強く示しているかのように、は

つきりと遠くからも眺めることができる。下に置かれている左のみ手は少し斜めにさがって、たなごころがよく見える。藤原時代の仏像によく見られる形ではあるし、薬師如来の手の位地によく似ている。結伽したみ足の上の衣紋は実に刻みが強い。このような点から藤原末期の様式を示している仏像と思われる



(阿 弥 陀 像)

れている。釈尊が「来れ、比丘」と、新参の弟子を呼び寄せて、自分の坐っていた敷物の半分に坐らせた話は經典には常に繰返されて説かれている。その「仏、半座をわかち給う」というような暖かさが、今、対している如来の口許から聞かれそうな気がしてきた。かつて私は仏像の中で、如来像を余り好ま

のであろうか。ともかく鎌倉時代の仏像としては変わっていることは事実であろう。仏像というものは忿怒の相の中に慈悲を、慈しみの中に親が子をさとすように厳しさと励ましを含んでいると言われる。一見、冷く見えるこの阿弥陀様の中に、確かにやさしさが含ま

なかった。それよりも菩薩や天部に属する仏像を好んだ。なんとなく人間味のある仏像、一緒に泣いたり、笑ったり、宮沢賢治のいうような「オロオロ歩キ」の仏像が好きだった。事実、仏師にしてみても、平凡な人間味を超越した仏像を彫るのは困難であつたろう。それに比べれば自分のイメージを元にして、近親の者の姿や形を借りて作ることのできる仏像はそれ程困難ではなかったろうか。古い仏像ほど良い仏が多いというのは、なにも古さを尊ぶことではなく、一人の仏師の精魂こめた願いが結ばれているからに相違ない。たくさん仏師が養

成され、仏像がそれらの人の分業によってでき上る時代には、形は整っていても、「仏作って魂入れず」になりがちなのは当然のことと言えるであろう。稚拙な仏でも精魂こめた一つの仏像は確かに琴線を動かすものだ。

堂々たるこの弥陀如来は確かに人間味もなく、稚拙でもなく整っているけれども、だから人をひきつけないという仏様ではない。親というものは何も言わなくても、平々凡々の顔をしていても、子供の気持を見抜き、ソーとしておいて、一人心をいたため、子供の成長を念じている。黙っていてもお互が通じあい、信頼しあっているのこそ、本当の親子の姿ではあるまいか。そのような情愛が、今、拝している阿弥陀様のお顔から滲みでている。

かぜのむたほとけのひざにうちなびき

なげくがごときむらまつのかえ

会津矢一

鎌倉の大仏を詠じたものであろうが、全く処と風情がこのみ仏にそのままあてはまる。塗金の具合によってボテついたようだとか、何も後世に塗金し直さなくてもよかったではないかなどという文句は、信仰の場には全然

不必要である。造型的に言えばそうあった方がより善かったというだけであろう。信仰と芸術の立場の考えがもたらす人間の欲望にすぎない。

法然上人と慈眼房の問答に、上人が往生の業には称名がすぐれていることを説いたのに対し、慈眼房は観仏がすぐれているとし、先師良忍上人もそう言われていると応酬したところ、上人は「良忍上人もさきにこそむまれ給いたれ」と突放された。また、或る人が称名の時、心を仏の相好にかけてよいかどうかを質問した際、上人は「源空もはじめはさるいたづら事をしたりき。今はしからず」と強く否定している。法然上人は温和な人と言われているが、この点だけは実に厳しかった人であるように受けとられる。それは一枚起請文の一節にまで受けつがれている。このような観仏がいけないと言われる上人の言葉を深く考えめぐらさねばいけないだろう。仏像と見るから観仏になり、仏そのものと見れば念仏は自然に口からほとぼしることになるのではあるが。一体、いつになったら正しい念仏を私は唱えることができるのだろうか。

徳川家の制札を写しているS君と、御住職

の好意で鏡面仏を拝見した。承久二庚辰天二月日、平政子敬白と左右に書かれている鏡面仏を見た途端、二人は顔を見合わせた。何か求めるものに会ったそんな気持の仏像である。稚拙な仏、アルカイック・スマイル（古拙の微笑）を漂わせている唐銅でできた懸け仏である。まさしくオロオロ歩きのお仏である。この仏は本尊の阿弥陀如来を写したものであるとか。私の気持はいつのまにか、いつもの私に帰っていた。笑っているような、泣いているような、なだめすかしているような、人間の苦悩と一緒に味わっている阿弥陀如来。このみ仏ならば何の威圧も感ぜず、いつまでも向いあって坐っていられるだろう。実際坐っていたい。キッと何かを教えてくれるに違いない。御住職に無礼をわび、温い声を後に松籟とともにこの地を辞した。何か来てよかったという気持を味わいながら。

帰途、立ち寄った鎌倉瑞泉寺の紅白の梅と水仙は、この日の思い出を、より高めたものにしてくれたように思われる。

浄土歌壇

岩野喜久代選

天

東京 二宮 綾子

地蔵尊、道に朝茶のほのかなる湯
気めでたまふ如月の朝

評 さむい二月の朝、凍てた道を通りかかると、道端のお地蔵さまに誰が上げたのか湯気の立つお茶がそなへてある。お地蔵さまも喜んでいらつしやるようだが、それを見る自分も心が和んで、あたたかい気持ちになつたというわけである。

地

東京 久地 楽真緑

さむからん植え忘れたる水仙の寄
り添ひて寝る納屋の片隅

評 これは水仙の球根である。春の庭に水仙や他の花々が咲くようになつた頃、納屋を片づけに入つて、植え忘れした球根の隅にあるのに気づいた女らしいやさしい歌である。

人

神奈川 熊坂 満

アパートが洋傘千せり草の実のき
ものの裾に著ける様にて

評 面白い形容である。石造何階建かのアパートの干物をかく新鮮に感じた眼は非凡である。

神奈川 中里 史子

嗚咽にもなるべきを堪へ寒き日の
山を凝視めてひた歩みけり

東京 平川 梅子

如月や夕の寒き北風に吹き上げら
れし三日月としぬ

島根 吉田 弘道

高うねの一つ一つに百姓の力こも
れり雪は残して

石川 神徳 凱一

梅の花咲きてありしと小さな枝
を手にして捧ぐる子あり

東京 紫藤 よね子

亡き母が訴へにける悲しみを身を
もて知れる時とはなりぬ

福島 朝日 蝶子

子ら二人南に北に遠ければいかに
して見ん老いたる母を

東京 星野 千代

群青の海の彼方に大島の煙は白し
雲となびきて

秋田 宮田 賢太郎

季の乱れ北の国さへ春めけど慰め
かねつわが心濡る

大阪 山村 綾子

山峽をうづめつもりし新雪よ丘よ
り高く白梅の咲く

奈良 大口 善信

法華寺吉野郡に唯一つ我ら一門こ
れを護持する

愛知 堀江 真鯉夫

がさがさと貝殻ふみてのぼりゆく
寒き漁村のかたむきし軒

愛知 桜井 鶴見子

西日いま彼の階上のガラス戸にあ
やしく燃えも出でなんけしき

東京 うへの つねや

信をもて貫くのみと答えらる八十
翁の声にうなづく

小樽 奥村 信子

白珠と刃の性をあはせ持つ奥の日

高の雪と思ひぬ

神奈川 張山 はるみ

厨辺の隅々までもぬるみ来ぬ立春
の陽を硝子戸にして

愛知 清水 敬山

黒潮の藻屑と成りし亡き靈に捧ぐ
る花輪海を火と化す

福岡 吉末 真竜

職なくて母に連れられ神前に子は
真剣に守り札を受く

看とるきもなく逝きまし母の枕辺
に七人の児が咽び泣くなり

東京 浅川 敬子

心ふと連れ去られたる虚ろさの衿
かき合はすこの夕まぐれ

星一つ杜の杉にまたたきて一人母
待つ夜の静けさ

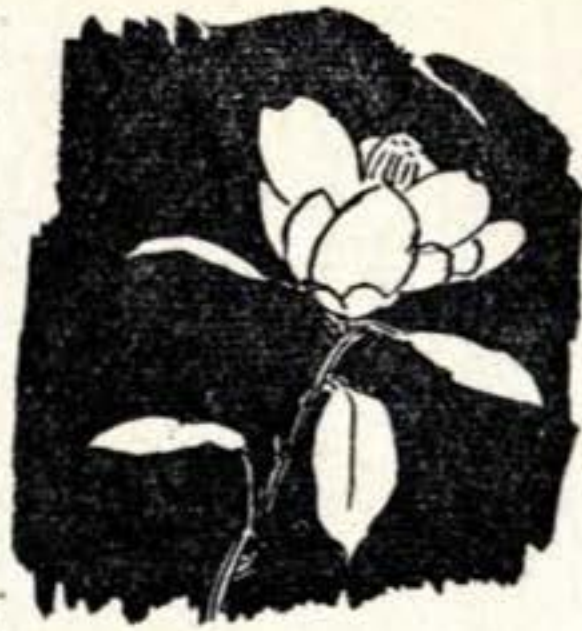
愛知 清水 竜一

十方を遍く照らすみ光は依怙なき
弥陀の大慈悲にして

選者 詠

護られてあり祈られてある身ぞと
手あはす時の多くなりゆく

童話 迷子の小羊



渋川敬子

ふかしたとても暖かそうな毛を沢山もっている羊がいました。

「一頭、二頭、三頭、四頭……十、二十、三

十、五十、九十八、九十九、百」

天上天下を指さして、お立ちになつてゐるお釈迦さま、楽しいうれしいお花祭りも、もうすぐですね。

野原も山も、まるで赤や、青や、黄色の水をまいた様にきれいなお花が沢山咲いています。ひばりの赤ちゃんは今日もお母さんひばりと一緒に、とっても楽しそうに、「ピーチク、ピーチク」と可愛い声で鳴きながら、お山の方へ飛んで行きました。

そのお山の影のも一つ影にも、きれいなお花の沢山沢山咲いている野原があります。その野原には、体中が綿の様に白くって、ふか

れどれ皆な帰つて来たかな」と、可愛いおつむをなでては、「一頭、二頭、三頭、四頭、五頭……二十、三十、百」と数えて、わらを敷いたお家の中に寝かせるのです。

百匹の羊は皆な元気で運動をしたので疲れたのでしよう。すぐに、静かに眠つてしまいました。

もう広い野原には、だーれもいません、お空の上には、仏さまと、まんまるいお月様がここに顔で、羊さん達を、そーっと、のぞいています。

静かな夜です。お月様も一人ぼっちになつてしまったので、眠くなつて来たのでしよう、大きなあくびをしている内に、お空が、明るくなつて来てしまったので「さようなら」とどこかへ行つてしまいました。東の空には、たのしい朝が待つてます。キラキラと銀色に輝き始めると、羊飼のおじさんは、あの角笛を「ボーボーボー」と吹きました。

「メエーメエーメエー、朝ですよ朝ですよ」一番先に飛び起きたのは一番小さい小羊さんでした。「メエーメエーメエーおはようおはよう」「メエーメエーメエー」元気な羊さん

達は、小川のきれいな水で、上手に、お顔を洗います。

おじさんは、「さあ、もうこんなに暖くなったのだから、今日は冬の着物を、脱がせて、きれいに上げてようとにこにこ顔で、それはそれは大きな鉄を「チヨキチヨキ」させています。

「一番大きい羊君からにしよう。」

「チヨキチヨキチヨキ。」

一番の羊君は、四角い箱の上で、綿の様な毛を気持よさそうに切っています。

二番目の羊君も、「チヨキチヨキチヨキ」

三番目の羊君も、「チヨキチヨキチヨキ」四

番目、五番目、と、羊のお友達は、だんだんきれいになって行き、体が軽くなったので、

「びよんびよん」とそれはそれは今迄よりも、もっともっと楽しそうです。

小さい子供の羊は、お風邪を引くといけませんので、今日は毛を切るのを、辞めました。小さい小羊さんは、お母さん羊が毛を切っている時に、「遠くへ行ってはいけませんよ」と言われたのを、忘れてしまったのでし

ると、美味しい青草を見つけ、夢中で食べていて山の中に入ってしまったのです。小羊さんは気がつき、お家に帰ろうとしましたが、山の中は広いので、どっちに行っても、路が解らなくなり、とうとう暗い森の中迄来てしまいました。

昼間でも、うす暗い森ですので、夕方になると真暗です。何にも見えません。

小羊さんは、悲しくって悲しくって「メエー

メエー、お母さん、羊飼のおじさん、小羊のメー子ちゃん」と何度も呼んで見ましたが、

「サラサラサラ」と、どこかで水の流れる音だけが聞えて来ます。

「あ、そうだ、あの川迄行けばつきと野原へ帰れるかも知れない。」

そう思った小羊さんは、急な、凸凹坂道を、一生懸命になって行きました。大きな石に、

つまずいたり、転んだりしたので可愛い足か

らは、真赤な真赤な血が流れ出て、それはそれは痛そうでしたが、我慢をしてやっと川の

所迄、来る事が出来ました。

あーら大変、川だと思ってたらそうではなくそれはそれは深い谷川だったので。

足の傷は、ずきずき痛むし、悲しくはなるし、「メエーメエーメエー」と泣き続けます。

さあ大変、羊飼のおじさんは、いつもの様に「ボーボーボー」と角笛を吹いて羊を集め、毛を切ってきれいになった羊を一頭ずつ数えては小屋に入れています。

「九十六、九十七、九十八、九十九」

「変だなー」

「一頭足りないぞ、もしかしたら数え違いかな」

「も一度数える事にしよう」

「一、二、三、四、……九十八、九十九」

やっぱり一頭足りないのです。

「おや一番小さい羊がいないぞ」

「こりや、大変」

「こうしてはいられない」

おじさんは、九十九頭の羊を寝かせ、大急ぎで、真暗い森の中迄探しに出掛けました。

おじさんは、お母さん羊の泣き声を真似て、「メエーメエー」言い乍ら方々を探し歩き、

やっと森の所迄来ました。

ふと下の谷川を覗くと、何か小さな白い物が

動いているのです。

「おや何だろう」

「あっ小羊だ」

おじさんは険しい谷間をどんと小羊に近ずいて行きました。

小羊は、小さな声で、「メエー」と一回泣いただけでした。

「お、よしよし、淋しかったろう……あれあれこんな怪我をして」

「よいしょ」おじさんは自分の着ていた上衣を脱いで、小羊はそれに包まって、やっとお母さん羊や、お友達の所へ帰る事が出来ました。羊は亦、もとの百頭になったので、「メエーメエーメエー」とそれはそれはうれしうです。

小羊さんは恥かしそうに、「仏様御免なさい」と言っています

広い野原のお空には、昨日よりも、もっと、まんまるい、お月さまが出ています。私達の仏さまも、にこにこ笑って見えています。

おわり

新刊紹介

吉田 絃二郎 著

「愛の扉」

吉田絃二郎氏逝いて二年本月二十日の三回忌記念出版として、今回発見された未発表小説が上梓された。

「気のすすまぬ結婚をした美貌の女性をめぐる夫とその部下達、更らにはるかに歳したの少年のその女性に対する憧れを描いたもので、淡々としたものであるが清冽な気分をもった真剣な恋愛小説であった。

恐らく今もこんな女性はいらるであろうし、こんな少年もいるにちがいないと思つた。

ただ現代流行の乱倫小説とはちがつて、それらの主人公達が、健康な何か向上の意志と反省とを持っている点が興味をひいた。……

作品は初期のものらしく不充分のところ

もあるが、一種の熱情をもって貫かれている点で何か自伝的な要素を感じないでもなかった。少年が歳うえの女性に憧れるあたりは丁度「挽歌」などを裏がえしたような形で、充分な情熱とリアリティをもって描かれていた」中河与一氏の跋文である。

浄土創刊以来本誌のために麗筆をふるって下さって来た故人がみまかつて以来、本誌の紙面は何処か穴のあいたような気がしてならぬというのが、近来の専らの声であるがこれに応えることはまづ不可能に近いせめて、故人の近刊を掲げて、その一端をうずめることとしたい。

幸いに、本号には吉田夏子氏のしみじみとした、そして、あるが如き思ひ出の記を得たので併せて読んで頂ければ幸いである。

【第二書房発行】
A5版二九七頁
価 二一八〇円

(水谷)

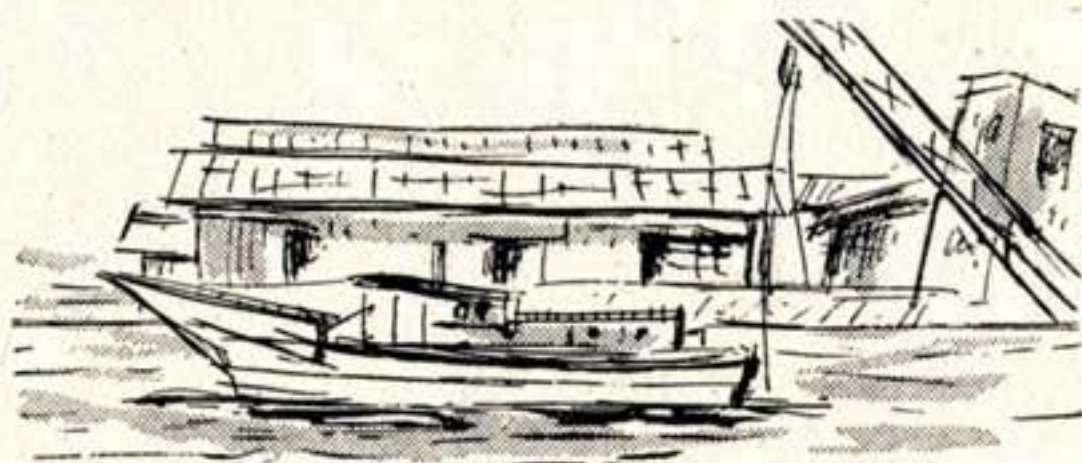
今回、本誌の紙面拡充、内容刷新をはかりましたところ、読者諸賢には絶大の御協力を恭くし、且つ、新規御申込みも続々と頂き、関係者一同、大いに感謝致しております。ますます専念努力し、本誌の真価を発揚せしめ、皆様の御愛顧にむくゆる存念でございます。

左に新規御申込みの尊名を列記して、お礼と致します。(敬称略)

家政学園支部(十二名)(京都)
講安寺支部(二十名)(東京)
円心寺支部(二十七名)(埼玉)
大光寺支部(二十名)(大阪)
常林寺支部(二十名)(茨城)
専修寺支部(二十五名)(茨城)
栄立院支部(二十名)(東京)
善導寺支部(三十名)(福井)
西福寺支部(二十五名)(東京)

林泉寺	(東京)	長念寺	("	正法寺	(島根)
桑谷 祐弘	("	丹生寺	("	東覚寺	(滋賀)
松野 瑞昌	("	丸山 宗隆	("	龜山 俊定	("
大松 寺	("	山野井貫琇	("	光明寺	("
藤本 泰弘	("	河原 信三	("	佐々木竜雄	("
大元 良成	("	広隆寺	(岩手)	東極楽寺	("
乗蓮寺	("	菅原 千秋	("	住田 正運	("
宝松院	("	大川 正一	(青森)	人見常五郎	(京都)
鈴木 成元	("	大泉寺	("	法林寺	(福岡)
樋口 亮栄	(神奈川)	玉泉寺	("	真光寺	(福岡)
教安寺	("	工藤 淳亮	(北海道)	熊野 真道	("
石川 亮一	(埼玉)	転法輪寺	(京都)	法然寺	(愛媛)
吉田 善隆	("	田村 心広	("	永田 恵眠	(佐賀)
杉山 俊光	(千葉)	大恩寺	("	大津 宗円	(熊本)
市東忠次郎	("	野島 宣道	("	門谷 元吉	(長崎)
雲竜寺	(栃木)	石川 良宣	(岐阜)	稻永 法俊	("
安国寺	(群馬)	埜野 昭雄	(三重)	佐賀 慈海	(東京)
萩原 明善	("	前田 池蓮	("	正定寺	(佐賀)
大光院	("	加藤 法順	("	沢 真勝	(岐阜)
松谷 操	(福井)	照源寺	("	大善寺	(福岡)
安養寺	("	延命寺	(大阪)	谷部 禪雄	(東京)
玄向寺	(長野)	神田 大円	(山口)		

良寛さん



春のやわらかい日ざしの中で、ネコが丸くなつて眠っている。縁側にまで、春風に誘われて桜の花片が舞い落ちる。そういった風景をみる度に、思い出されるのは、良寛さんのことである。

村の童^{わらべ}をあつめて、手毬をついたり、かくれんぼうをしたり、春の一日を、心ゆくまで楽しくすごして、みち足りた顔をして、五合庵に帰つて、一人住いの気安さから、ゴロリと横になつて、嬉しい夢の世界に入つて行く。

こうした毎日を送る良寛さんは、現在の、はげしい世相の中にいる私共には、思いも及ばぬような、清く、尊いものを持つていたと思われる。俳人一茶も、やはりその奇行と奇骨とで、私共庶民大衆に人気がある。また、京都の大徳寺に住んだ一休禪師も頓智の方で大分人気がある。

これにくらべると、良寛さんは特にとり立ててこれというところはないのだが、何となく人を引きつけるものを持つ

ている。ことに、子供達の楽しい物語りの世界では、押しもおされもせぬ主役を演じている。

今度、東郷豊治という、こういった方面とは全然はたけちがいの——たしか数学者か物理学者だつたと思うが——人が、創元社から「良寛」という本を出した。これが読売文学賞を獲得したのである。非常にまじめな研究書で、良寛さんのことを知るには好箇の本である。

漢詩や和歌をよく作り、また一風変つた、めめずののたくつたような書を矢たらに書く。そういった反面、寺の門前で終日手まりをついて遊んでいる。毎日毎日、それこそ神経をすりへらして生きている。現在の生活では思いも及ばぬような、のんびりしたのどかさが漂っている。半日でもいい、こんな風にしてすごしたら、さぞかし気も晴れ晴れとすることだろう。そう思う人はこの「良寛」を一読されるとよい。

出家をとげてより

此身ただ雲まかせ

樵夫とまじわり

児童とたのしむ

王候うらやましからず

神仙ねがわしからず

棲家はいずこなりとも

奥山をよしともおもわず

日々こころあらたなれば

生命のどこにおわるべし

しかしいくら良寛さんでも生きることはつらい。しかし彼は我張った。

きようは終日村々を

転々と乞食し歩いた

日が傾いてから路が遠く

北風が身を切るばかりだった

薄衣はなかば破れかかったが

木鉢はいよいよ古雅になった

飢えも寒さもなんのなんの

先輩はみなこの苦練に堪えたのだ。

一人でいる時は、こうして、齒をくいしばって我慢した。しかし、良寛さんはあくまで朗らかであつた。

きようはお布施がたんまりあるよ

そこで君に会いに来たんだ

君と一杯やりたかったが

銭のない時ばかりだったのでなあ

そして、折りあれば盃を傾けて、この

世の生を楽しんだ

ほろ酔ひの足もとからし春の風

酔ひ臥しのところはここか蓮の花

盃をほして眺むる秋日和

良寛さんは子供を愛し、酒を愛し、自

然を愛した。かといつて、情事にうとい

木念仁かというと、どうして、仲々に粹

な風情もわきまえておられる。

あのおぼろ月夜に

君の手をとり散歩したとき

私たちの囁きを盗み聞きして

水鳥が飛んで逃げたつけ

月いでて

棲にのぼり

君をおもい

涙ぐみぬ

破れたころもの裾をひき、杖と鉢をもつて飄々として村々を托鉢して歩いた良寛さんの胸の中には、二十の青年のような想いが波打っていたのだ。

人間良寛、てらわずに、かくさずに、たくまずにありのままに生きた人。そして今もお幼な児の友として生きている人良寛さんは子供好きだった。

×

×

×

×

しれん者の姿

ある男が罪を犯して逃げてきました。追手はますます近づき迫ってきます。ふと気がつくとなんか前方には恐ろしい猛獣がいます。絶体絶命になって立ちどまってみると、すぐそばに古井戸があつて、藤蔓が下つています。彼はこの藤蔓を伝つて、井戸の中に降りてゆきました。すると今度は井戸の底に毒蛇が口を開けて彼のくるのを待っているのがわかりました。彼は上にはゆけず、下には降りられず、仕方がないので、藤蔓を命の綱として、宙にぶら下つていました。間もなく手がぬけるように痛んできましたが、そればかりでなく、井戸の上に白と黒との二匹の鼠が現れて、命の綱の藤蔓をかじり始めました。

彼のいのちは風前の灯です。藤蔓がかみ切られたとき、または手の力がつきた時には、下に落ちて毒蛇の餌食にならねばなりません。その時、ふと頭をあげて上を見ると、蜂の巣から蜂蜜の甘いしづくが、一滴二滴したたりおちてきて、彼の口の中に入りました。すると彼は自分の危い位置にあるのを忘れて

山の内さんはもう七十歳を越して、孫さん相手にひなたぼっこをしながら、好きな講談本をよむか、ひるの演芸をラジオできくかして、毎日を暮していればいい身分だった。

お彼岸も過ぎて、春らしい気配がただよふ小春日よりの今日縁側の日だまりに座をしめて、茶を啜ってみた。

小さい子供達は母親に連れられて、駅前のマーケットに買物に行った留守の静けさが、おき忘れたような思い出を、山の内さんの心の中によみがえらせた。

戦争の烈しかった頃のこと、山の内さんも世の常の親と同じに、可愛い息子二人共戦地に送って、その留守を老妻と守っていた。

その頃はまだ今よりも苦かったが、それでももう閑職についていて、隣組の組長とか、防護団の役員の仕事の方が本職みたいになって、毎日を、何となく心せわしく暮していた。丁度、今日のよ

とこと

し 心 感

との念願は同じである。だから、黙って自分も、仏壇に時々手を合わせもしてみた。それも、奥さんには見つからないように。

その時も、チーンと鐘がなっていた。丁度そんな時だった。上の息子の戦死の報が届いたのは。むろん、呆然とした老人夫婦は、

二、三日は口もきかずに、ひっそりと暮していた。悲しみも日を経るにつれて、その生々しさがうせて来る。

その間、二人共、仏さまに手を合わせることが忘れていたが、またやがて、毎日、チーンと鐘がなるようになった。山の内さんは今度は少し、悲しみを帯びた声でいった。

「お前、仏さんにおねがいがしたが、駄目だったね」と。しかし、奥さんは静かに首をふって答えた。「いいえ、そんなことはありませんよ。仏さまにおねがいさえしていれば、博はきつと帰って来ますよ。務もき

つと、仏さまのお浄土へ連れて行って頂いているでしょうよ。それに第一、仏さまにおすがりしていると、私の心が何だかしゃんとしますからね」ふりむきもしないでそういつて、静かにお念仏をくりかえしていた。

山の内さんは、そんなことを思い出してみた。その老妻も去年の秋に、山の内さんを残してむすこのいるお浄土へ旅立った。

「そうだ、わしも一つ、お寺へ行ってお和尚さんに、お経を習って、毎日拝むとするか」

日はぐつと西にかたむいて、あたりはいささか陰が多くなって来た。山の内さんは自分の敷いていた座布団を持つと、障子をあけて茶の間に入った。家の戸口が開いて、孫の可愛い声が耳に入ってきた。

(N・T)

×

×

×

×

うっとりとして甘い蜂蜜をのみこみました。

この小話もまた、経典の有名なたとえ話です。ある男とは、誰でもない一般の人を指すので、あえていうなら、ひとり生れて死んでゆく一人限りのすがたでしょう。追手、猛獣毒蛇という前や後や下にいる恐しいものどもは、欲のたねで、これらのものに常に追いまくられ、それらの餌食になるばかりの姿です。古井戸の一本の藤蔓とは、人の命のことです。白黒の鼠とは、月日のことです。白と黒の月日によって刻々と人の命がかじりとられてゆくのであって、いつ切れるかわかりません。蔓の切れない以前にも、力が及ばず事故によって落ち込むかも知れません。最後の蜂蜜の滴とは、眼の前の欲の楽しみを表わしています。一時のほんの僅かな甘い滴でも、口の中に入りさえすれば、自分の境遇も忘れて満足してしまう姿をいうのです。

しかしこのたとえ話の一人の男とは、万人の姿ではありません。こんな危い境遇にいてしかも僅かの享楽にふけっている人々を指したものです。たよりない蔓にしがみついてしまわぬことが大切なわけです。

信仰相談

(質問歓迎)

担当 佐藤賢順

問

仏教、特に浄土教では、仏の慈悲ということを教えの中心にして説いて、どのような重い罪を犯した者も、仏のお慈悲の力で救われる、と教えているようですが、仏教(主に浄土教)では、正義とか破邪とかいう方面を説かないのでしょうか。もし慈悲がどのような邪悪をも、無条件的に許すとしたら、社会正義の確立などということは仏教には望めないことになると思いますが、如何でしょうか。

(小田原市、北川健司)

答

仏の慈悲といっても、ただ盲目的に、無批判的に、人を可愛がるというよう

な慈悲ではありません。人間的な母性愛や恋愛から連想されるような愛ではありません。

慈悲はきびしい批判で磨かれています。冷徹な智慧で磨かれています。物事のありのままの姿を、汚れない心で、ありのままに写す、というのが仏道の智慧です。曇りなく、歪曲

のない鏡の面に、物の真の姿が映ずるように、自らの心を汚れなく平らかにすると、物の真の姿が映りますが、これが智慧です。これが般若という修行ですが、この中に、正義も破邪も含まれているのです。仏陀は智慧の修行をして慈悲を体得した如来ですから、悲智円満です。仏の慈悲は、ただの盲目的な愛ではなくて、悪を批判し、これを憎み制する慈悲です。社会正義の確立こそ仏の慈悲の目指すところです。しかし、すでに犯してしまった悪に対しては、これを許すという寛容さを持っています。

キリスト教は正義ということをやかましく説いて、仏教には正義の觀念が稀薄だと批難しますが、右のようなわけで、仏教の慈悲には正義以上のものが含まれているのです。キリスト教では最後の審判で、「義とせられる」(ジャスティファイ)者は天国に生れ、

そうでない者は地獄に堕されます。地獄に堕された者は永久に救われる望みはなくなりま

す。しかし仏教では、五逆十惡を犯した者でも、南無阿彌陀仏を称えれば、如来の大慈悲の力で極樂に生れさせてもらうことができます。それは仏の慈悲が、一方、悪を憎み制して、嚴重な戒律を定めて生活を規定するとともに、他方、一度、犯した罪惡に対しては、憐れみをもってこれを許し、救おうという寛容さを持つからであります。慈悲が大きく深ければ深いだけ、それだけ寛容であるわけであり

問

前の問題と關係のあるお尋ねになりますが、近頃、道德教育を行うことの是非がやかまし論ぜられています。道德教育は

新学年から実行されることになりましたが、道德教育について、仏教の立場から、はっきりした態度なり方針なりが示されたということとを聞きません。これは残念なことです。その時、その時の思想問題に対して、仏教側からの統一のある指導的意見が示されると大変有益だと思います。ところで、仏教の立場としては、道德教育の問題をどう考えたらよろ

しいでしょうか。(同じ質問者)

答

お説の通り、その時、その時の思想問題に対して、仏教の立場から総合的な指導的意見を示すことは、是非とも必要で、それには常設的な思想問題研究所のような設備がほしいのです。しかしまだそういう研究所が設置されていませんが、速かにそのような機関の出現を望んでいます。

ところで道德教育の問題ですが、今日では、それが必要であるかないか、という議論の時期は過ぎて、それをどう実行すべきか、という実行方法を定める段階になっていると思います。誠実とか正直とか勤勉とか愛情とか純潔とかということが、教えて悪いわけはなく、またそういうことを実行せずには、立派な家庭生活や社会生活が営まれるはずはないのであります。逆コースだとか何だとかいつて、道德教育に反対するのは、それぞれの徳目を封建的な考え方や帝国主義的な考え方とひっかけて、道德教育を古い社会組織の再現のために利用しようとするからです。そのような目的のための道德教育は断乎として排斥しなければならぬのは勿論です。

しかしほんとうの人間性の上に立った道德、ほんとうに人と人とを結びつけるための道德——愛情、誠実、正直、孝行などなしに家庭や社会は一日たりとも存立することはできないのです。人と人とがほんとうに結ばれて生きていく道が道德です。

仏教はほんとうの人間性の探求であります。仏教の実践修道はみなそのためであります。六波羅密(施し・身を戒む・耐え忍ぶ・励み・心の平静・正しい知識)とか、五戒(生命を大切にする・盗みをしない・邪しまた性関係を結ばない・虚偽を言わない)などの徳目のうちに、仏教の生活原理は見出されます。こういう諸の徳目を整理して、そのうちから、生活の原理を求めなければなりません。私はかつて試論として、無私・慈愛・純潔・勤労・平和の五つを徳目として挙げてみました。無私と慈愛は一般原理、純潔は家庭生活の中心となる徳目、勤労と平和は社会生活の徳目であります。

世にいわゆる進歩的思想家なる者は、道德教育は不必要だといって、固苦しいことを余り好まない大衆の御機嫌を取っているように

ですが、これらの人達でさえも、正直とか友情とかいうことが不必要だというのではありませんまい。学校で道德教育を独立した課目として設けても、これを教えることのできる先生があるまい、ということ、反対をする人もありますが、過去の偉大なる人格が、人生を人間を、社会を、どう考えたか、ということをお願いすることはできます。エゴイズムを打ち破るために、正義の勝利のために、売名欲に克つために、人と人とをほんとうに結びつけるために、過去の聖人たちがどのような歩みをしたか、その足跡を辿ることはできます。正しく生きようとした人達の歴史です。それによつて、道德科を教える先生自身が人間性を深めるのです。そこに道德教育の意味があるのです。

会員各位にお願い

- 1 会員五名以上で支部をご結成下さい。
- 2 支部には、支部拡張用としてお申し込み次第無料で見本「浄土」をお送りします。
- 3 二十名以上の支部には、毎月浄土を一冊贈呈します。

犬と人間の間柄

犬にとって、宇宙を飛びながら死んだり、

南極の氷上に放棄されたり、まさに最悪の年というより、歴史上かつ期的なできごとがあった。野犬狩りは論外としても、今までも病院や研究室で多くの同族が人間に利用され、殺されてきている。だからといって、今回も科学上のために殉死したのだというだけではどうも割り切れないものがある。

ジステンパーで倒れた仔犬をだいて泣いている子供の姿に、そつと涙をふいたことのある経験は、犬を飼う程の人なら大方ご存知のことである。ところが現在では人と犬との間柄が少々変ってきているようである。極端に申すなら犬は人に敵対するもの、少なくとも犬は人を警戒するものと変ってきた節がある。

このようにして現在では、人も往来にいる犬には不気味さを感じるし、犬の方も人をみると胡散臭そうにする。昔は犬が人をかむこ

とは狂犬でない限りあり得なかったのに。

犬が外敵に対する警備に任じられるように訓練されたために、人をみれば泥棒と思うのかも知れないが、もう一つの大きな原因は、犬がいつも繋がれていることである。もともと犬は長距離選手である。一時の快速は、他の動物に劣るが、長距離になると犬がだん然強い。いい換えれば、犬は終日駆け廻っているのが習性である。それを無視して短い綱で終生繋がれていては、犬もノイローゼになるのも無理でない。

中支の戦場にいた頃、群犬とわたり合ったことがある。

戦場の犬は、多く野犬化していて人に近ずかない。二三匹の犬が腐肉に喰らいついている風景は鬼気迫るものがある。ポツカリと穴があいていて、中から喰い荒された跡をみかける度に、自分たちが葬ってきた愛馬も、こ

友を得るには

世尊は弟子に教えて申しました。

「人は親しまねばならぬ友と、親しんではない友とを、見わけなければならぬ」

朱に交わればあかくなると昔からいう通り人間一生の間、幼少から年老いるまで、友人を見わけることが大切です。幼少の頃は悪い友達と遊ばないにかぎりますが、長じて世間に暮すにはそうはゆきませぬ。そこで親しむべきものとそうでないものとを区別して交際しなければなりません。

親しんではならぬ友人とは、むさぼりの深い人、語のたくみな人、へつらう人、浪費する人であります。お世辞を申しってくる人には、それだけで警戒しなくてはなりません。言葉だけで、口先きだけで人が左右できると思っている人がいます。こんな友人からは遠ざかることが第一です。何ごとにも欲ばる人や浪費する人と一緒にいると自分までが、これに似てくるから恐しいことです。

次に親まねばならぬ友とは、まことの助けになる人、苦楽をともしにする人、忠言を惜ま

んな姿にされてはいないかと憂うつな気持でいつか犬を憎む気持になっていた。

そこにゆくと軍犬のセパートは愉快な点がある。大切に育てられ、係りから日々訓練されている所は、堂々たるものである。高い塀をとび、堀を越え、ほふく前進する姿は立派である。「かーれ」の号令で、防護服で身を固めた兵士と格闘するのを見ると、たのもしものである。ところがいざ実戦になって、

軍犬に戦闘させてみると、敵にとびかかる所は、さすが訓練のたまものと感心するが、決して敵をかまない。従って敵を倒さない。つまり平常の訓練で、敵にとびかかって被服をかみ切ることは上手であるが、ただそれだけなのである。敵をストリップするだけである。

余談はさておき、私たちが通洲の近くで、敵にかこまれ約一週間も孤立したことがある。

例によって私は部落内の巡視に出かけた。午前三時頃、皎々たる月光がさしていた。家のかげからかげを拾って歩きながら、部落を一歩出はすれたところで、突然目の前に犬が数匹現れた。私はギクリとして立停ると、続々犬が集ってきた。たちまち私は犬に囲まれて

しまった。凡そ二十四以上はいたと思う。物音一つしない頃だけに、低くうなる声が地の底からでも聞えるようであった。

私は軍刀を抜いて身がまえた。軍刀がギリ光るのが、犬どものむきだした歯の白さに対して印象的であった。私は前面の犬よりも背後の犬の動静に全身の神経をつかった。ジリと私が進むと、犬の円陣もそれだけ動いた。かといって犬もとびかかつてこなかった。

ほんとのところ、私は弱ってしまった。朝になって若し隊長たる私が野犬にかみ殺されていたとしたら、何とも情ないことである。いつも夜半の巡視は自分独りで廻るのだが、この時ばかりは誰もつれてこなかったことが後悔された。相手は犬だから、五匹や六匹は倒せるだろうが、私はにらみ合ったまま、切ろうとはしなかった。

ずい分長く感じたが、五分位だったと思う。横の一匹が動き始めたが、これが合図でもあるかのように、スーッと犬どもはどこに行っただか消え去ってしまった。私は後もみないで、大急ぎで宿舎に帰って床にもぐり込んでしまった。

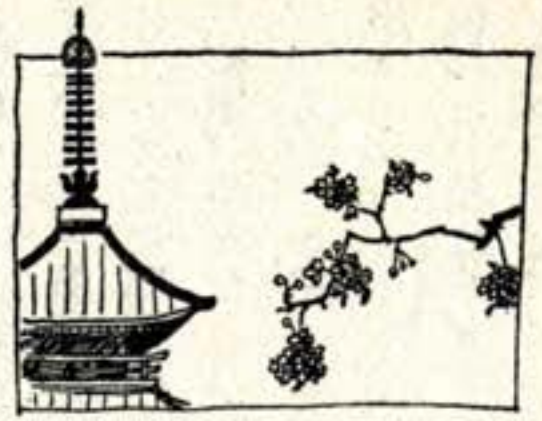
ぬ人、同情に富む人であります。このような人に対しては、自分から進んで、交際をお願いしてゆかなければなりません。

これをいいかえれば、不まじめにならないように注意を与え、かげにまわって心配をなし、災難にあった時には慰めとなり、必要な時に助力を惜まず、秘密をあばかず、つねに正しい方に導いてくれる人であります。これこそ得難い友人として感謝しなければなりません。

人と交際したならば、その人の長所を早く発見するように努めることが大せつです。そしてその長所の面だけに交際するのもよいかも知れませんが、難しいかも知れません。逆をいえば、人と交際したならば、早く欠点を見きわめ、その欠点とは交際しない工夫もよいでしょう。これはできることです。

そして世尊は

「自分もこのような友になることを心掛けねばならぬ。善き人は、その正しい行いの故に、世の中において、太陽のように輝くのである」と申しました。友を得るには、まず自分が正しい人となることが第一なのです。



法然上人の言葉

〔第一回〕

増 谷 文 雄

は し が き

——法然上人の言葉と文章について——

この国の仏教の歴史のなかにおいて、法然のしめる地位は、もつとも輝やかしいものであつた。その事業は、この国の仏教がもつたいくつかの波のたかまりのなかで、最高のピークをもたらしした。もつと具体的にいえば、日本仏教千四百年の歴史のなかで、真に日本人の仏教とよばれうるものを確立したのは、この師にほかならなかつた。

ふとみれば、黒染めの法衣をまとつた円満柔和の人が、東山吉水の地に隠棲して、数珠をつまぐりながら、余念もなく念仏している姿があるにすぎない。だが、よくよく歴史眼をとぎすましてみると、そこには、新しい思想とふるい思想とが、大きな渦まきをなして、疾風波濤の時代をこの国に現出していた。それは、新しい日本仏教の生みの苦

しみであつた。そして、この師は、その大いなる転換の焦点をなして、その大渦まきの中心点に坐していたのである。この人をほかにして、新しい日本仏教の真髄は知られない筈である。

しかるに、今日の人々は、ややもすれば、まず親鸞におもむき、「歎異抄」をひもどく。それは、どうしたことなのであろうか。それには、いろいろの理由が存する。その理由を、いま私は、六つの箇条にまとめて語つておきたいと思う。

第一には、この師の文章のことである。この師は文章のまずい方ではなかつた。むしろ、文章に巧みにして、たいへん整つた文章を書かれた。一例をあげてみる。

「末代の衆生を、往生極樂の機にあてて見るに、行すくなしとてうたがふべからず。一念十念にたりぬべし。罪

人なりとてうたがふべからず。罪根ふかきをきらはず。時くだれりとてうたがふべかふべからず。法滅ほうめつ己後の衆生なを往生すべし、いはんやこのごろをや。わが身わろしとてうたがふべからず。自身はこれ煩惱具足せる凡夫なりといへり。」

【黒田の聖人へつかはす御文】

立派な文章であり、整った文章である。だが、文章がととのつていふことは、かえつて、新鮮さと力感をうしなうこととなる危険がある。そして、法然の文章は、そのような危険をはらんでいることが多い。それに比べると、親鸞の表現は、荒けずりで、強行でさえもある。たとえば、「他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり。」

【歎異抄】

というような言い方が、彼の表現にはおおい。よくよく見れば、主語と述語とが喰いちがつていて、首尾一貫を欠いている。だが、そのような表現が、かえつて新鮮さをもたらし、力感を与えることもある。文章というものの恐ろしさがそこにある。

第二には、その発言の態度についてである。法然の発言の態度は、人師としてのそれであつた。知らるるがごとく、この師ははつきりと浄土宗という一宗の開立を宣言した。

人々にむかつてこの新しい教えをつたえろということについて、はつきりとした自覚をもつてせられた。

「我すでにこの道理を得たり。自身の出離におきては思ひ定めつ。他の為にこの法をひろめんとおもふ所存の義、仏意に叶ふや叶はざるや。」

【法然上人伝記(九卷伝)十七】

そう思い煩いながら、まどろんだ夢のなかで、この師は善導に会つて、その証あかしを受けたという。

だが、はつきりと自覚して人師として立つたということ、そこに、あたらしい制約を生じた。彼はいつも、人師として、教える者として人々のまえに立たねばならなかつた。その点においても、彼は、「親鸞は弟子一人ももたずさふらふ」と語つた親鸞と、まったく異なる立場にたつていた。その立場のちがいが、いつも、この二人の物言いのうえにも現れていた。法然はいう。

「しかるにこのごろのわれらは、智慧のまなこしめ、行法のあしなへたるともがらなり。聖道難行のけはしきみちには、惣じてのぞみをたつべし。ただ弥陀の本願のふねにのりて、生死のうみをわたり、極楽のきしにつくべきなり。」

【浄土宗略抄】

この一節は、教える者のことばである。もちろん、法然自身をもその中に加えて、「このごろのわれら」ではあるが、その重点は、いうまでもなく、聞くものの側におかれる。それに反して、親鸞の物言いは、いつも自己の単数に重点がおかれる。

「親鸞にをきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおほせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」

自己の体験をうち出して語る、自己の所信をさらけ出して、「念仏をとりて信じたてまつらんと、またすてんとも、面々の御はからひなり」とひらき直る。それが親鸞の物いい方の特色である。そして、この二人の態度のうち、今日の人々は、とかく、人師ならざる物いい方に心ひかれるのである。

第三には、その発言の根拠についてである。よく知られているように、親鸞は「偏依法然」——ひとえに法然に依る立場をとり、法然は「偏依善導」——ひとえに善導による立場をとった。だが、よくよく考えてみると、親鸞の「偏依法然」と法然の「偏依善導」のあいだには、まことは、大きな相違があつた。親鸞がひとえに法然に依るとい

うとき、その法然は、彼の師として、口ずから教えをたまわつた人である。じつと目をつぶれば、いつでも法然は、彼のまえにその現身をあらわした。しずかに耳をかたむければ、その現身の声はいつでも凜として聞かれた。つまり、その教説だけでなく、その全人格が、親鸞をして偏依せしめていた。そこから、はじめて「たとひ法然聖人にすかされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ」という絶対曇依の感情がふつふつと沸いてくるのである。親鸞の発言の根拠は、そのような法然にたいする絶対曇依の感情を^{たていと}経とし、その教えを身にあらって試みられた必死の体験を^{よこいと}緯として織りなされたものであつた。

それにたいして、法然の善導にたいする偏依というのは、人格的なものではなくて、もつと教学的なものであつた。法然はむろん善導にちかに遇つたことはない。その人格にほれこんだというのでもない。いわば、彼の新しい考え方にたいして、善導の注疎がもつともよき根拠を与えるものであつたから、彼はその所説をとつたのである。その意味において、法然における善導は、教学的に依るべきものを与えた人にすぎないのであつて、おなじく偏依というけれども、親鸞における法然の重さとは、比すべきものでなか

つた。

そのことを、もつと具体的にあきらかにしようとならば、黒谷の経蔵における法然を考えてみるがよいであろう。その時、法然はなんの意図をもたずに経蔵に入つたわけではあるまい。その意図は、善導のものを読むためではなかつたことも明らかである。その時、法然はすでに新しい考え方を、すくなくとも、その輪廓においては形成していただろう。そして、その根拠を、その証明を、いずれかの経論において見出さんがためにこそ、彼は経蔵に入つたのにちがいない。その意味において、真に新しきものは、善導をまたずして、すでに法然のなかに熟していたのである。だが、その新しきものが如何にして法然のなかに芽生えてきたか、そのことについては法然自身はまったく語るところがない。問うものがあれば、彼はいつも、善導をもつて答え、安樂集をもつて答え、大集月蔵経の文をひいて答える。

「問。さてはわれらがごときのをろかなるものは、浄土の往生をねがひ候べきかいかん。答。安樂集にいふ。聖道の一種は今の時には澄しがたし。一には大聖をさる事はるかにとをきにより、二には理はふかくしてさとりは

すくなきによる。此故に大集月蔵経にいふ。わが末法の時の中の億々の衆生、行ををこし道を修するに、いまだ一人もうる者はあらじと。さまに今末法五濁惡世なり。ただ浄土の一門のみありて通入すべき道なり。」

【要義問答】

かかるものが、法然の答えかたの典型的なるものであつた。いふなれば、法然の発言の根拠は経証であつた。それにたいして、親鸞のそれは、師証とそして身証であつたといふことができる。そして、経証はどうやら今の時の人々には、いささか魅力うすきものとなつてきていると思うが、いかがであろうか。

第四には、その発言の大胆と慎重との相異についてである。法然の発言は、しばしば、慎重にして意味深長なるものがあつた。たとえば、

「しかれば、善人をすすめ給へる所をば善人の分と見、悪人をすすめ給へる所をば我分と見て、得分にするなり。かくの如くみさだめぬれば、決定往生の信心かたまりて、本願に乗じて順次の往生をとぐるなり。」

【常に仰せられける御詞】

という。ふとみれば、この師は、善人をも立て、悪人をも立て、いずれを正機と考えられたか、はなはだ判明ならぬように思われる。だが、よくよく見れば、「悪人をすすめ給える所をば我分と見て」とおしえ。「善人をすすめ給える所」については、「我分と見よ」とは言つておられない。その含みは、じつに深長なるものがある。

もつとずばりと言つて下さつたらと、私どもには思われる。だが、その重き立場はそれを許さなかつたにちがいない。この新しい教えにたいして批判的な立場をとる人々は、虎視眈々として、攻撃の手がかりをつかもうとしていた。この師にしたがう人々のなかにも、誤解して極端にはしる憂いがすくなくなかつた。いかに慎重に発言しても慎重すぎることもなかつたのが、法然の立場であつた。

それにたいして、親鸞の発言は、大胆にして傍若無人のものであつた。そして、彼の立場はそれでよかつた。彼の発言の舞台は、大きく二つにわかれる。その前半は関東であつた。田夫野人がその聞き手であつた。その後半は京都であつた。還暦をこえてから京都に帰つてきた親鸞の生活は、あわれにも淋しいものであつた。念仏のおしえは天下を風靡していたけれども、その中における彼の立場はささやかものであつて、その影響力は小さかつた。彼は何をい

おうと、聞き耳を立て、言葉尻をとらえて、批判の種にしようとするものはなかつた。そこには、法然のような慎重は必要がなかつた。そのことが、あの大胆な発言の自由を与えた。だが、今になつてみると、その大胆にして傍若無人の発言は、法然の慎重にして含みのおおい発言に比して、はるかに大きな魅力を入々にたいして持つこととなつた。

第五には、その発言と人物の関係についてである。よく知られているように、法然は、学解一世にぬきんでて、「智慧第一」の称をほしいままにした人である。念仏のおしえを罵倒してやまなかつた日蓮すらも、この師の学智にたいしては最上級の言葉をつらねている。その人がなにゆえに「さらにその器にあらず」となげかねばならなかつたのであろうか。

親鸞が、わが身は罪惡深重、煩惱熾盛にして、「とても地獄は一定すみかぞかし」と語るとき、わたしどもにも、その心ばえは、よく解るような気がする。その人は、異性のはだも知つていた。愛欲のなやみもなめた。骨肉の不和に涙しなければならぬこともあつた。しかるに、いま法然が、罪惡生死の凡夫の自覚になきぬれて、

「はづべし、はづべし。かなしむべし、かなしむべし

と語るとき、わたしどもには、なにゆえにこの師がかくも恥じ悲しまねばならぬかという思いが先にたつのである。

おそらく、今の時の人々には、親鸞はなにか身近かに感じられる親近感があるであろう。それに反して、法然にはなにか、容易に近づきたい聖者の感があるのではなからうか、それは何よりも、親鸞が煩惱の泥まみれの念仏者であつたからであり、法然はどこか行いすました学往兼備の聖者であつたからであろう。

それらさまざまな理由のゆえに、人々は、まず親鸞におもむく。だが、それらの理由にもかかわらず、これを本質的にみれば、念仏のおしえにおいて、法然のことばはもつとも重い価値を有する。何となれば、この新しい教えは、この人のなかにはぐくまれ、この人より流れ出たものであ

るからである。それにたいして言わば、親鸞の言葉はことごとく、その原型をこの師の言葉のなかに有する。彼はただ、それを聞いて、心に銘じ、身にあてて、さらに人々に語つたにすぎない。

そのことは誰でも知つてゐる。だが、今日わたしどもが、法然にいたつて、この新しい教えのもつとも感銘ふかい言葉を聞こうとするとき、その道は、わたしどものまえに閉ざされてある。端的にいわば、「歎異抄」のようになすぐれた語録が、この師の言葉のためにあまれていない。法然に近づく人のすくない第六の理由はこれである。

そして、わたくしがいま、「法然上人の言葉」をここに集め録して、いささか私釈をも加えてみようとするのは、外でもない。この閉ざされたる法然への道を、もう一度ひらき整えようとする一つのころみなのである。

毘沙天門 (解説)

びしやもんでん。或は多聞天ともいう。護法と施福の二つの性能をもつ。

護法というのは、仏の守護として四天王の一であり、無数の夜叉を引きつれて、仏のおいでになる地上を主として守り、また同時に

その道場の傍らで説法をきいてゐるところから多聞天ともいわれる。その姿は、甲冑を着た左手に宝刀、右手に如棒を持つ坐像である。宝刀を持つのは、仏の通場を守るといふ意味である。牛若丸で有定な京都の鞍馬寺の毘沙門天は右手に矛、左手は額にかざしている。軍神として拝されることが多い。

一方、福德で、人々に福を施す神でもある

それは、古代インドでは北方には山が多く、鉾物を沢山産出するところから、北方の守護神である毘沙門をこれ等の産物の支配神と信じられたのが始まりである。わが国ではこの方面の信仰が盛んで、毘沙門供養、毘沙門講などの行事が盛んであり、縁日も賑やかである。

会員だより

○謹啓 日本はまだまだ寒さの最

中と存じます。ここ布哇は毎日十

七、八度から二十六、七度の間を

朝、昼、夜とくり返して気候的に

は全く洋上の楽園です。

毎々浄土を御恵送頂き有難く感

謝の外ありません。数日前正月号

を受領封筒の中から取り出した瞬

間余りの垢ぬけのした装てい、異

る雑誌ではないかと思われる程で

した。内容も本当に従来に見ない

充実したものの十円の値上げでこれ

位立派なものが出来るのなら五十

円にしてより立派なものと、古

歌を思い浮べて一人ほほえんでい

る次第……

金錢に關係なく編集に従事され

る諸先生方の御苦心の結晶と感謝

の外ありません。

正月号を受領の余りの立派さに

書かせて頂いた次第です。

今後共よい立派なものを御発刊

下さる様念願致します。

一九五八年二月二十四日

ハワイ浄土宗別院 新保義道

○南無阿弥陀仏

元祖法然上人御遠忌も近づきい

よいよ御多忙の御事とお察し申し

上げます。未法濁乱の今ほど我が

浄土教を必要とする時はないかと

考えられ、先生各位の一そうの御

努力御ふんとうをお願い申し上げます。

さて私事、永らく御誌のおそだ

てを頂き、殊にここ数年喘息にて

は前々よりの浄土をとり出し拝見

してよろこびにしたり居りました

が、二年程前から目がかすみ一年

前より全く本は見えなくなりまし

た。お別れするのは悲しいけれど

も私方ありません。私への送本は

今月までにて御やめ下されませ。

娘が徳島県におります。之に新た

に入会の手数をとらせましたから

末永く御導き下さませ。

およめになるか分りませんが一

言自分でお礼を申し上げますに差

し上げます。ほんの手心ばかりで

したためました、ありがとうございます

しました。お十念合掌

佐賀県 於保いく

○謹啓

毎月浄土を拝読させて頂いてお

ります。

仏教と云う事につきました浄土

を読ませて頂きます毎に段々わか

らせて頂いた様に思われますが、

はまだまだ一般社会の人達に仏教と

は何であるかを無関心で暮して居

られる方々が多い様に心われま

す。願わくば各寺院檀信徒一同の

者が今後一層緊密に融和されて仏

道に精進させて頂かれますようお

「浄土」購読規定

一部定価 金四十円

(送料四円)

会費 金 四八〇円

(送料不要)

浄土 四月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十三年三月廿五日 印刷

昭和三十三年四月一日 発行

〔定価四十円〕

編集人 竹中 信常

発行人 佐藤 密雄

印刷人 大橋 貞雄

印刷所 共同印刷株式会社

東京都品川区上大崎一ノ七八二

発行所 法然上人讃仰会

振替東京八二一八七番

最新刊

童話学入門

B 6 360頁 価480円 50円

日本童話協会理事長
駒沢大学文学部講師
東京高等保育学校長

内山 憲 尚 著

- ◎ 童話学は童話の基礎である。童話を話す人、童話を作る人、子供に話す人、幼稚園、保育所の先生、小学校教諭、日校こども会の指導者、児童教化に携わる人の知っていなければならない基本的なものです。
- ◎ 内山憲尚氏は30年来、童話学の大切なことを叫んで来られ、各大学や講習会等で講演されたり、研究された資料を整理してこの“童話学入門”を出版されました。

新宿区西大久保1-400

発行所 東京文化研究部出版部
取次所 日本童話協会

花 祭 用 品
お盆用品卸領布
各宗尊像御影御守謹製
仏 教 図 書
カレンダー等発行

東京都千代田区代官町二番地

三 宝 閣

電話 丸ノ内(23)二〇六六番
振替 東京 五四七九九番

取次領布所 両羽会館

東京都文京区表町五四番地
電話 小石川(92)三六五〇番

若い世代の人々のために!!

大正大学教授
竹中信常著

宗教心理の研究

A 五判五九〇頁
定価一二〇〇円 千実費

宗教が現代人の心理にどのような受けとられているかということ、古来の学説史に即して説明すると共に、信仰の心理、靈感の心理、宗教心等とテーマとしてとり上げている。宗教を理解し、信仰を他に伝へんとする者にとって必読の書である。

東京都中央区京橋二の一(塩山ビル)

発行所

青山書院

振替東京 九九三〇三番

東京都品川区上大崎一丁目七八二

取扱

法然上人鑑仰会

振替東京 八二一八七番

幼児教育に専心する方々へ!!

解説増谷文雄 画井上与志夫

詩島田きんや

絵本ののさま

B 5判 七色刷 美本
定価 八〇円 千一六円
(十部以上七〇円千実費)

この本は、宗祖 法然上人のご生涯とご教旨を、少年少女にわかりやすく、親しみやすい形で描きだしたものです。内容は、国宝「勅修御伝」によったものであります。

指導 外語教授 増谷文雄 画 中村ひろし
監修 東大正大講師

教育 法然さま
定価一三〇円 千二四円
(十部以上一〇〇円千実費)

うつくしい絵と、やさしい童謡とで、仏の世界のイメージをおさな心の中に、植えつけるようにつとめ、お母さま方のために、それぞれの絵に解説をつけました。

値段改正中 材料値上りの為お値段は下記の一・二割高です

鎖ブランコ 2人乗	Y 13,000
鎖ブランコ 3人乗	Y 15,000
鎖ブランコ 4人乗	Y 22,000
鎖ブランコ 6人乗	Y 26,000
椅子ブランコ 4人掛	Y 13,500
太鼓橋	Y 10,000
ジャングルジム 中型	Y 28,000
単式滑台 中型	Y 23,000
複式滑台 中型	Y 36,500
動物付き遊動木	Y 30,000

此他各種、一報カタログ送

配達実費(都内横浜 500 円以内
其他1000円以内)組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、(荷造費当社・送料着払)
組立説明書送付



篠沢鉄工所

東京都大田区堤方町718
電(75)1024(池上駅東3分)

幼稚園 運動遊具

全国幼稚園・保育園・小学校・各団体に、良品を廉価にの
ットーで、堅牢安全な遊具を納入、好評を頂いております。松
答・光明・芝・明照等の浄土宗幼稚園採用。